4　松尾頭地区分布調査の報告
—妻木晩田遺跡第７次分布調査—

１．はじめに

妻木晩田・青谷上寺地遺跡整備室では、妻木晩田遺跡の全体像を把握することを目的として、分布調査を継続している。今年度は、松尾頭地区、松尾城地区の谷部を中心に、未踏査部分の現況把握に努めた。

調査期間は、2003（平成15）年12月９日～10日の２日間である。

２．松尾頭地区における分布調査の概要

松尾頭地区では、丘陵頂部平坦面および緩斜面に弥生時代中期後葉から古墳時代前期まで集落が安定して営まれている。その東側には松尾池という農業用溜池があり[1]、池の水位が低下する季節に詳細な分布調査を行うことが課題の一つであった。

そこで、松尾池の水を抜き取る時期に踏査を行った。踏査ルートは図１に示すとおりである。以下、踏査ルートに沿って報告する。

（１）池の北側には大小多数の円礫が散乱している。一方、汀線付近に石垣の一部が確認でき、これらの礫は池の護岸の石垣が崩れたものだと思われる。（２）池の堤防の南側、松尾城地区から松尾池に突出している尾根先に平坦地を確認した。（３）松尾城地区６区の北側では、多数の円礫が散乱している。（４）松尾頭地区２Ｎ区の東側でも同様に円礫が散乱していた。（５）松尾頭地区北側の丘陵先端では、満水時の汀線上に土坑状の落ち込みを確認した。

踏査地周辺は、池の築造に伴って地形の改変を受けており、池の底面や汀線付近は全面的に地山の土が露出している。ただし、松尾頭地区２Ｎ区北側には、汀線付近に暗褐色土が残存しており、その東側では土坑状の落ち込みが確認できた。また、この付近では以前に弥生土器が採集されており、弥生時代の包含層が残存している可能性もある。

３．松尾城地区における分布調査の概要

松尾城地区は、孝霊山から北側に延びる丘陵の裾野にあたる急峻な丘陵である。中央付近には南北に深い谷が入り込んでおり、東西の丘陵を二分している。

これまで、東側の丘陵を中心に分布調査が行われている。そのため、今回の調査では西側の丘陵とそれを取り巻く谷部を中心に踏査を行った。踏査ルートは図１に示すとおりである。以下、踏査ルートに沿って報告する。

（６）松尾城地区西端の谷は、地表面が草に覆われており、表面観察から有益な情報を得ることができなかった。（７）松尾城地区を二分する谷を南側から踏査したが、地形が急峻なうえ、中腹には竹藪があり、表面観察が困難であった。（８）松尾頭地区７区東側の谷筋を登って尾根を目指した。尾根に至るまでの標高140m付近には平坦地があり、そこには多数の円礫が散乱していた。中世の松尾城に関する施設である可能性もあるが、詳細は不明である。

（９）（10）松尾城地区７区の北側では、比較的広い平坦地を３カ所確認した。それぞれの平坦地で土塁のような構造物が南東から北西にかけて地形に沿って存在する。詳細は不明であるが、これも中世の松尾城に関する施設である可能性がある。

４．まとめ

第７次分布調査では、松尾頭地区と松尾城地区の未踏査部分を中心に２日間にわたって調査を行った。その結果、以下の所見を得た。

（１）松尾池の底面は地山が露出しており、弥生時代の包含層が遺存している可能性は低い。ただし、松尾頭地区２Ｎ区北側の汀線付近では、遺構の可能性がある落ち込みを確認している。また、松尾城地区から松尾池に突出している尾根先に平坦地を確認した。

（２）松尾城地区は急峻な地形であり、斜面部に弥生時代の遺構を見つけることはできなかった。松尾頭地区で見つけた平坦地、多数の礫、土塁状の遺構は中世松尾城に関連するものの可能性がある。

（河合　章行）

註

１）寛政４（1792）年に堤体を補修したという記録があり、18世紀初頭の築造と推定されている。

石垣
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)
堤防
<松尾頭地区>
<松尾城地区>
1区
2N区
2S区
3区
4区
5区
6区
7区
S=1:5000
0
300m

図1　分布調査ルート図

1

4

2

5

3

6

1．満水時の松尾池（東より）
2．調査時の松尾池（東より）
3．松尾池北側斜面の状況（南西より）
4．松尾池内の平坦地（北より）
5．松尾城地区西端の谷（南より）
6．調査地近景（松尾城地区から松尾池）